

電子故障の診断力を

道内整備業

技術、料金化も課題

スキヤンツール研修相次ぐ

車の各装置の電子制御化が進み、昨年10月からは新しい故障診断の統一規格「J-OB D II」の新型車への整備義務づけが始まっている。道内の整備業界でも電子トラブルに対応するための「外部診断器」を使った実践的な研修が各地で活発に行われている。整備工場として増える電子トラブルの診断技術習得を目指す動きではあるが、一方で故障箇所の追求による「診断料」の確保という新たな料金体系の構築も課題として浮かび上がっている。

整備業界の研修で最近特に目立っているのが電子制御装置の診断に欠かせない外部診断装置の活用方法。診断器、スキヤンツール、ダイアグテスト、OBD診断器など呼び名は様々だが全てが



研修会は定員オーバーが続いている

車に搭載されている内部診断器（ダイアグノース）と通信するための機器で目的は同じ。車の電子制御化が進むにつれその故障拡大やトラブルに至らないまでも故障コードやチェック

ランプの消去など同機器類の使用頻度は拡大する一方にある。自社で対応するのかそれとも外注するのかは別にしても、自動車整備に電子化による

そんな中、昨年10月からは日本の統一規格である「J-OB D II」の整備義務づけが新型車から始まり、来年9月には継続生産車や輸入車にも適用されることも、業界内の診断器導入の気運を後押ししているようだ。新しい故障診断装置はこれまでのOBDシステムの

故障診断が欠かせない要素になってきているのは確か。

るように道内での外部診断器研修が目白押し。今月（9月）分だけでも2日の苫小牧自動車整備協同組合（4面参照）をはじめ、3日宮田自動車商会、4、5日イサカ札幌支店（5面）、14日ロケット札幌支店、16、18日が札幌振と道央圏だけでこれだけの研修会が企画されている。

ES（ファイネス）が全面改良し、整備の現場が求める故障事例集を新搭載するなど技術情報を充実させる。事例は約3千件のデータベースでスタートし、全国の各整備振興会の技術相談窓口を活用しながら順次、故障診断に役立つ修理事例を蓄積する。

このように、発生する電子トラブルの技術対応が進む中で、この10月からは日整連が展開するインターネット活用の整備情報サービス「FAIN

今後はファイネスの故障事例集充実への協力とともに、診断技術をどのように整備料金に反映させるかという「診断料」徴収が業界共通の課題として浮上してくる。

ように電気回路断線を検出する簡易的な機能だけではなく、各種センサーの情報から排出ガス対策装置の異常を検出し運転者に知らせる機能まである。

このため今後は今まで以上に診断器活用機会拡大が予想されており、それに対応す